

けんこう処方箋

北海道柔道整復師会会長 萩原 正和



ほっかいどう

水曜生きる

木曜よむ語る

金曜楽しむ

土曜考える

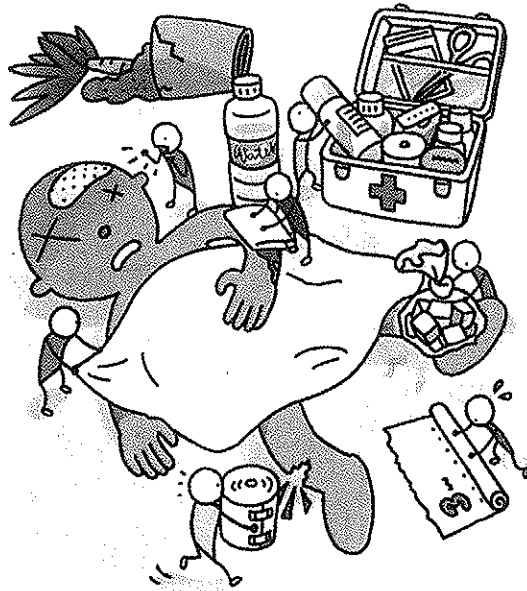
火曜学ぶ

災害でケガ、まず止血・感染対策を

近年、自然災害を身近に感じる機会が多い。交通や通信手段、電気、水道が止まる中で負傷したら、どうしたらよいのだろうか。

2011年、東日本大震災と東京電力福島第一原発事故により、その最悪の事態は起きた。地震、津波、放射能汚染。生活物資のほか、医療物資や医療関係者も不足し、被災地は大混乱に陥っていた。北海道柔道整復師会の会員も現地にかけてつけて活動し、ケガの治療はもとより精神面のケアにもあたった。

災害は突如として発生する。大事なことは、それに直面した時にどう対応できるかで、日ごろからの準備や心構え、知識が必要だ。



イラスト・佐藤博美

例えば、医療チームが来るまでのケガ人に対する初期処置の原則の第一は、止血と感染対策。小さな傷でも細菌に感染しないよう消毒し、真水で洗う。そして、

清潔なガーゼなどを患部に当てて圧迫する。このためにも必要な医薬品は用意しておきたい。また、出血が多い時は、心臓より患部を高く保つことが重要だ。

骨折や脱臼などで骨が傷口から見える、もしくは飛び出ている場合も要注意。患部が細菌感染している可能性が高いからだ。びくびくしてとっさに骨を戻す方もいるが、そのまま戻さず止血に努めたい。戻してしまつと、感染源の洗浄ができないばかりか、血液などを通して細菌などが体中をめくり、敗血症や骨髄炎など重篤な症状を招く原因となるからだ。

次に冷却。患部を冷やして患部局所の代謝を下げることで、炎症反応を沈静化させる。炎症や感染などにより、全身症状であるショック症状が現れる場合もある。初期にはショック症状が出て

いなくても、数時間後に発生する可能性もある。この判断は非常に難しく、専門的な医療知識が必要になるが、少しでもショック症状が起これると考えられる場合は、全身を毛布でくるみ、手や足の保温に努める。ショック症状は、体の冷えにより悪化してしまうからである。

意識がない方は、脳や脊髄損傷の可能性もあるので揺さぶらないこと。そのような方には呼びかけをす。それでも起きなければ手や足をつねるなど、痛み刺激を与えて意識状態を見るべきだ。

北海道柔道整復師会では昨年、道と「災害時における柔道整復師の救護活動に関する協定書」を締結した。独自の勉強会などを開き、道内のどこで災害が発生しても対応できるよう準備を整えている。